



# 岡本かの子全集

## 第二卷

冬樹社

# TARO

岡本かの子全集 第二卷

昭和四九年六月三〇日初版第一刷發行

著 者 岡本かの子

發行者 高橋直良

發行所 冬樹社

東京都千代田區神田神保町二一八

電話東京二六四—〇三四六

振替東京七七五七

印刷所 株式會社太平洋社

製本所 有限會社三和製本所

製函所 株式會社光陽紙器製作所

本文用紙抄造 王子製紙春日井工場

表紙用クロス 日本クロス株式會社

裝 畫 岡本太郎

裝 幀 栃折久美子

第二卷 目次

|       |   |
|-------|---|
| 鶴は病みき | 三 |
| 敵     | 三 |
| 渾沌未分  | 三 |
| 決闘場   | 三 |
| 春     | 三 |
| 明 暗   | 三 |
| 母子叙情  | 三 |
| 川     | 三 |
| 高原の太陽 | 三 |

肉體の神曲……………二六

解題・校訂……………二七

小

說

2



## 鶴は病みき

白梅の咲く頃となると、葉子はどうも麻川莊之介氏を想ひ出していけない。いけないといふのは嫌という意味ではない。むしろ懷しまれるものを當面に見られなくなつた愛惜のところが催されてこまるといふ意味である。わが國大正期の文壇に輝いた文學者麻川莊之介氏が自殺してからもはや八ケ年は過ぎた。

白梅と麻川莊之介氏が、何故葉子の心のなかで相關聯してゐるのか、麻川氏と葉子の最後の邂逅が、葉子が熱海へ梅を觀に行つた途上であつた爲めか、あるひは、麻川氏の秀麗な瘦軀長身を白梅が聯想させるのか、または麻川氏の心性の或る部分が清澄で白梅に似てゐるとでもいふためか——だが、葉子が麻川氏を想ひ出すいとぐちは白梅の頃であり乍ら結局葉子がふかく麻川氏を想ふとき場所は鎌倉で季節は夏の最中となる。葉子達一家は、麻川莊之介氏の自殺する五年前のひと夏、鎌倉雪の下のホテルH屋に麻川氏と同宿して避暑して居た。

大正十二年七月中旬の或日、好晴の炎天下に鎌倉雪の下、長谷、扇ヶ谷邊を葉子は良人と良人の友と一緒に朝から歩き廻つて居た。七月下旬から八月へかけて一家が避暑する貸家を探す爲めであつた。光る鐵道線路を越えたり、群る向日葵を處々の別荘の庭先に眺めたり、小松林や海岸の一端に出逢つたりして尋ね廻つたが、思ひ通りの家が見つからなかつた。結局葉子の良人の友人は葉子達をH屋の一棟へ案内した。H屋は京都を本店にし、東京を支店にし、そのまた支店で別荘のやうな料亭を鎌倉に建てたのであつたが商賣不振の爲め今年には母屋を交ぜた三棟四棟を避暑客の貸間に當て、京都風の手輕料理で、若主人夫婦がその賄に當らうと云ふのであつた。

母屋に近い藤棚のついた二間打ち抜きの部屋と一番端れの神樂堂のやうな建て前の棟はもう借手がついてゐた。眞中の極普通な割り合ひに上品な一棟が、まだあいてゐたのを葉子達は借りることに極めた。どの棟の部屋もみな一側面は同じ芝生の廣庭に面し、一側面は凡て廊下で連絡してゐた。

決めて歸りがけに葉子達は神樂堂の方の借主を、どんな人達かと聞いて見た。五六人取り交ぜたブルジョアの坊ちゃん、若いサラリーマンや大學生達だとの事、それから藤棚の方へと聞いた時、

「麻川莊之介さん、あの文士の。」

H屋の若主人は（好いお連れ様で）と云はんばかりにやや同業者の葉子達の方を見た。

「ほう。」

葉子の良人は無心のやうに云つたが、葉子はいくらか胸にこたへてはつとした。

麻川莊之介と云へば、その頃、葉子より年こそ二つ三つ上でしか無かつたが、葉子にはかなり眩しい様な

小説道の大家であつた。葉子のはつとしたのは、葉子の稚純な小説崇拜性が、その時すでに麻川氏に直面したやうな即感をうけた爲めでもあつたらうが、ほかにいくらか内在してゐる根據もあつた。

葉子の良人戲畫家坂本は、元來、政治家や一般社會性の戲畫ばかり描いて居たが、その前年文學世界といふ純文藝雜誌から頼まれて、文壇戲畫を描き始めて居た。文壇の事に晦い坂本はその雜誌記者で新進作家川田氏に材料を貰ひ、それを坂本一流の飄逸また鋭犀に戲畫化して一年近くも連載した。これは文壇の現象としてはかなり唐突だつたので、文人諸家は驚異に近く瞠目したし、讀者側ではどよめき立つて好奇心を動かした。なかで麻川氏の戲畫化に使はれた材料は麻川氏近來の祕事に近いもの——それももちろん川田氏から提供された材料だつた。文壇に晦かつた坂本が、さして祕事とも思はず取扱つた材料は、麻川氏にとつての痛事だつたとあとで坂本に云ふ人がかなりあつた。

「そりやあ氣の毒だつたな。川田君も一寸つむじ曲りだから先輩に對する自分のうつぶん散してもあつたかな、いくらか。」

とその材料を持つて來た川田氏への心理批判も交つて坂本は苦笑した。

その後短歌から轉じて小説をつくり始めた葉子がその處女作を麻川氏の友人喜久井氏に始めて見て貰ふことを頼んだ。だが喜久井氏はその時、文壇的な或る事業劃策中だつたので、友人麻川莊之介に見てお貰ひなさいと葉子に勧めた。

葉子は早速麻川氏に手紙を書いたが、その返事がいつまでたつても來なかつた。葉子は今迄ひとに返事の手紙を出して返事を貰はなかつた覺えが無かつたので、いくらか消氣てすこし怨みがましい心持になつて居た處へ、ある人がそれに就いて、

「あの人は、坂本さんの戲畫の材料をあなたから出るとでも思つてゐるか知れませんか。そして用心深いか

ら身邊を用心する爲めにあなたを敬遠しちまつたのかも知れませんか。」

と葉子に云つた。さう云はれれば葉子は坂本より文壇に近いわけである。けれど文壇的社交家でない葉子は文學雜誌記者であり新進小説家としての川田氏が提供する程の尖鋭的な材料など持ち合はし得べくもなかつたのだ。葉子はますます味氣ない氣持ちになつたが麻川氏がもしさういふ用心をするならそれも當然な氣がしたし、それやこれやで小説をひとに見て貰ふ氣などはいつか無くなつて居た。

葉子といふ女性は、時によつては非常に執念深く私情に驅られるが、時によつてはまるで別人のやうに公平で淡泊な性質も持つて居る。麻川氏とのいきさつも理解がつくといつかさつぱりと、葉子の心に打ち切られて仕舞つた。ところがそのすこしあと、葉子は全然別な角度から麻川氏を見かけた。それは或夜、大變混雜な文學者會が、某洋食店樓上で催され麻川氏もその一端に居た。濫い色金紗の羽織がきちんと身に合ひ、手首のしまつたきびきびした才人めいた風采が聰明さうに秀でた額にかゝる黒髪と共にその邊の空氣を高貴に緊密にして居た。がさつな、だらしない風をした澤山の文人のなかに、さういふ麻川氏を見て葉子はここにすがすがしく思ひ乍ら、ふと、麻川氏の傍に嬌然として居るX夫人を見出した。そして麻川氏がX夫人に對する態度を何氣なく見て居ると、葉子はだんだん不愉快になつて來た。麻川氏はX夫人に向つて、お客が藝者に對するやうな態度をとり始めた。葉子はそので倫理的に一人の妻帶男が一人のマダムに對する不眞面目な態度を批判して不愉快になつたのでは無い。(ましてX夫人は兼てから文人達の會合等に一種の遊興的氣分を撒いて歩く有閑婦人だつた。善良な婦人で葉子はむしろ好感を持つては居るがからかはれて惜しい婦人とは思つて居なかつた。)麻川氏を惜しむところ、麻川氏の佳麗な文章や優秀な風采、したたるやうな新進の氣鋭をもつて美の觀賞を誤つて居るやうなもどかしさを葉子は感じたからである。しかし、現在見るところのX夫人は葉子の眼にも全く美しかつた。デリケートな顔立ちのつくりに似合ふ淺い頭髮のウェー

ヴ、しなやかな肩に質のこまかな縮緬の着物と羽織を調和させ、細く長めに曳いた眉をやや昂げて嬌然として居るX夫人——だが、葉子はX夫人のつい先日迄を知つて居た。黄色い皮膚、薄い下り眉毛、今はもとの眉毛を剃つたあとに墨で美しく曳いた眉毛の下のすこし腫ぼつたい瞼のなかにうるみを見せて似合つて居ても、もとの眉毛に對應して居た時はただありきたりの垂れ眼であつた。今こそウェーヴの額髪で隠れてゐるが、ほんとうはこの間までまるだしの抜け上つたおかみさん、額がその下にかくれてゐる筈だ——葉子はその、先日までのX夫人を長年見て來たので、今日同じ夫人が、がらりと變つた化粧法で作り上げた美容を見せられても、重ね繪のやうにいつい先日までのX夫人の本當の容貌が出て來て、現在のX夫人に見る美感の邪魔をする。それにもかかはらず麻川氏が變貌以後のX夫人に、葉子より先に葉子の缺席した前回のこの會で遇ひ、それが麻川氏とX夫人との初對面であつた爲めか、ひどくこの夫人の美貌を激賞したといふことが、文壇の或方面で喧しく、今日も麻川氏はこの夫人を觀る爲めに、この會へ來たとさへ、葉子の耳のあたりの誰彼が囁き合つて居る。葉子の女性の幼稚な英雄崇拜觀念が、自分の肯んじ切れない對照に自分の尊敬する藝術家が、その審美眼を誤まつて居る、といふもどかしさで不愉快になつたのだ。と云つて、幾度見返しても現在のX夫人はまつたく美しい。變なもどかしさだ。葉子は麻川氏と一緒に、X夫人の美を讃嘆して居ながら、何かにせもの、を隨喜して居るやうな、自分を、麻川氏を、馬鹿にしてやり度いやうな、と云つて馬鹿に出来ないやうな、あいまいな不愉快に妙に心持ちをはぐらかされた。

こんな氣持ちを葉子はその當時、或る雜誌からもとめられた「近時隨感」のなかに書いた。もちろん當事者の名まへなど決して書かずただ一種變つた自分の心理を敘述する材料としてかなり經緯<sup>けいゐ</sup>をはつきり書いた。(それを麻川氏が讀んだか讀まないか葉子は當時氣にもとめなかつたが、矢張り讀んで居たことを一ヶ月間H屋に同宿して居るうちの麻川氏との交際で判つた。)

とにかく、こんな前提は、いよいよとなると葉子の心から一掃されて、葉子にはただ崇拜する文學者麻川莊之介氏と同宿するといふ突然な事實ばかりが歴然と現前して來るのであつた。その後の事を語る順序として葉子の鎌倉日記のうち多く麻川氏を書いて居る部分を摘出する。

某日。——麻川氏は私達より三四日後れ昨夜東京から越して來た。今朝早くから支那更紗（そんなものがあるかないか、だが麻川氏が前々年支那へ遊んだことからの聯想である。）のやうな藍色模様の廣袖浴衣を着た麻川氏が、部屋を出たり入ったりして居る。着物も帶も氏の腹驅長身にびつたり合つてゐる。氏が東京から越して來ると共に隣の部屋の床の間に、くすんで青味がかつた小さな壺が、置かれたやう（私の錯覺かしら）な氣がする。宿の主人が置いたのか、氏が持つて來たのか、花は挿して無いし今後とも挿さないやうな氣がする。

某日。——麻川氏の太いバスの聲が度々笑ふ。隣の棟に居て氏のノドボトケの慄へるのを感じる。太いが、バスだが、尖鋭な神經線を束ねて筏にしそれをぶん流す河のやうな聲だ。

某日。——主人が東京から來たので、麻川氏はこちらの部屋へ挨拶に來た。庭續きの芝生の上を、草履で一步步いんぎんに踏み坊ちやんのやうな番頭さんのやうな一人の男を連れて居た。淺いぬれ縁に麻川氏は兩手をばさりと置いて叮嚀にお辭儀をした。仕つけの好い子供のやうなお辭儀だ。お辭儀のリズムにつれて長髪が颯と額にかかるのを氏は一々搔き上げる。一藝に達した男同志——それにいくらか氣持のふくみもあるやうな——初對面を私は名優の舞臺の顔合せを見るやうに黙つて見て居た。

某日。——朝、洗面所で麻川氏に逢ふ。「僕、昨夜、向日葵の夢を見ました。曉方までずっと見つづけたよ。」と冷水につけた手で顔をこしこし擦り乍ら氏は私に云ふ。「それで今朝、頭が痛くありませんか。」

私は何故だか氏に、こんなことを聞いて仕舞つた。「ほおう。まるでゴツホの問答みたいですね。」麻川氏はかう云つて、タオルで顔を拭き終へて私の顔を正面から見た。眼が少し血走つて居る。氏は「は、と一つ聲を匂切つて、「ではまた午後、……書前は原稿を書きます。」と云つて叮嚀にお辭儀をして部屋に入つて行つた。

午後わあ／＼と大聲を立てる若い女が麻川氏の部屋へ來たやうだ。夕方、恰好の好い中背の若い女の洋装姿が麻川氏の部屋から出て庭芝を踏んで歸るのを見かけた。横顔が少し下品だが西洋の活動女優のやうな線を見た。「大川宗三郎君（作者註、大川氏は麻川氏の先輩で、その頃有名な耽美派作家とも惡徳派作家とも呼ばれて居た。）の妻君の妹ですよ。赫子つてお轉婆さんですよ。」と藤棚の下で麻川氏が云つた。番頭さんのやうな若い男が縁側で私の顔をうかがつて居る。掃除した煙草盆を座敷に持つて來たH屋譜代の婆やお駒さんは開けつばなしの聲で「へへえ、あれが大川さん御自慢の妹さんですか。」麻川氏は苦つぽく微笑して云つた「別に自慢でも無いだらうが、細君より氣輕に何處へでも連れて行ける女だからな。」奥さんは日本風の顔立ちのおとなしい美人でせう、妹さんは違ひますね。」と私。麻川氏の番頭さんは云ふ「奥さんのやうな美人も好きだし、赫子さんのやうなのも好きだし。」麻川氏「つまり、釋迦に拜し、キリストに拜し……」「マホメットには誰がなる……ですか。」と麻川氏の番頭さん。麻川氏「莫迦。彼自身は飽まで嚴肅なんだぞ。」

某日。——二三日、畫家のK氏が東京から來て麻川氏の部屋のメンバーになつた。噂によれば夏目漱石先生が津田青楓氏を師友として居た以上K氏と麻川氏は親愛して居るのださうだ。K氏は、頭を丸刈にしたこつくりした壯年期に入つたばかりの人、吃々として多く語らず、東洋的なロマンチストらしい眼を伏せ勝ちにして居る。隻脚——だがその不自由さも今はK氏の詩情や憂愁を自らいたはる生活形態と一致させたや

や自己満足の諦念にまで落ちつけたかに見うけられる。けれども、矢張り逃避の世界が、K氏をめぐつて漠然と感じられる。それで麻川氏の性格や好みがありますK氏に傾倒して行くことも察せられる。それからすこしつき合つて居るうちに、部厚なこつくりしたK氏の體格のどこかに落ちつきくさつたそして非常にデリケートな神経が根を保つてゐる。麻川氏は自分の屹々とした神経の尖端を傷めないK氏の外廓形態の感觸に安心してK氏のなか味のデリカな神経に觸接し得る適宜さでK氏をますます愛好して居るのではあるまいか。

某日。——大川赫子が兄さんの大川氏と暫く別れ、近所に宿を極めてしばらく鎌倉に落ちつくのださうだ、で、今日からK氏のモデルになり始めた。晝前から、麻川氏の部屋では大騒ぎだ。ああいふ娘の存在は單調な避暑地の空氣を潑刺とさせて呉れる。「莊ちゃん。」と娘に呼ばれて麻川氏も大はしやぎだ。婆やのお駒が私の部屋へ來て、芝生越の樹立ちの中の小亭を指して云ふ「大川さんが来る前は書き物をするからあすこへ閉ちこもると仰るので、ほかのお客を斷はつてお貸ししてありますのに、赫子さんが来ると何も放り出してあの通り……。」と私達に遠慮し乍らなほ麻川氏のことを「口が旨い」とか「男にしては如才なさすぎる。」とかこの婆さんかなりあら探しで感じが好く無いが、麻川氏にも多少云はれる根據がある。

赫子が麻川氏と相撲でもとり始めたらしいど、たんば、たんの音、東京から來た二三人の麻川氏訪問者も交つてわつわの騒ぎだ。それをこつちの部屋でちつと聞いて居た私には、やがて、麻川氏のはしやぎばかりが別ものとなつて耳の底にひびいて來た。陰性を帶びたはしやぎ方だ。上へ上へとはしやぎ出さうとする氏の都會的な陽性を、どうしても底へ引き込む陰性なものがある。私の眼には一本の太い針金の幻覺が現はれた……どたり、地面に投げ出され乍ら、金屬の表面ばかりが太陽にきらきら光つてゐる……。

某日。——麻川氏と始めて少し文學論のやうな話をした。私が「どうも日本の自然主義がモーパッサンやフローベルから派生したものとすれば、私には異議があります。日本の自然主義は外國の自然主義作家の一

部分しか眞似てない氣がします。モーパッサンにしろフロベールにしろ何も肉體的な自然主義ばかりを主張してませんね。私はむしろ精神的な詩的香氣の方を外國の自然主義作家から感じるのですが。」麻川氏「さうですとも、何しろ日本の作家達は西洋を眞似るのに非常に性急です。それから、體力や精神力に全幅的な大きさが無い。従つて一部分を概念的に眞似るに過ぎないんですね。」氏は斯う云ひ終ると少し疲れたやうにひるすぎの太陽のきらきらあたる庭芝を眺めた。向ふの垣根の外に下駄の音がして長谷あたりへ來て居る麻川氏の知人達の聲が聞えた。私は氏の部屋を辭して自分の部屋で暫くやすむ——幽けさや、晝寢枕にまつはる蚊——こんな「句」のやうなものを詠んで麻川氏の寂し相な眼つきを想つた。

某日。——麻川氏と私とは、體格、容貌、性質の或部分等は、全く反對だが、神經の密度や趣味、好尚等随分よく似た部分もある。氏も、それを感じて居るのか、いはゆるなかよしになり、しんみり語り合ふ機會が日増に多くなつた。そして氏の良き一面はますます私に感じられて來るにも拘らず、何とも云へない不可解な氏が、追々私に現前して來る。それは良き一面の氏とは似てもつかない、そして或場合には兩面全く聯絡を持たないもののやうにさへ感じられる。幼稚とも意地惡とも、病的、盲者的、時としてはまた許しがたい無禮の徒とも云ひ切れない一面に逢ふ。

某日。——今日、麻川氏は終日椎の間の小亭で書いて居る様子だつた。私達も一寸海岸へ行つて歸つて來ると主人は晝寢、従妹は縫物私は讀書ばかりして暮らした。夕方、先日海岸で紹介されたT氏の弟が私の部屋へ遊びに來た。プロレタリア文學雜誌「種蒔く人」の同人で二十五歳、病弱な爲めW大學中途退學の青年だが病身で小柄でも聲が妙にかん高で元氣に話す男だ。殆どわめく様にマルクスだとかレーニンだとか談論風發を續け、はては刻下の文壇をプチブル的、半死蛇等と罵り立てる。十時近い頃青年は病的なりに生々した顔付きで兄の家へ歸つて行つた。歸り際に青年は少しおどけた顔付きで「あ、しまった、お隣にやあア

サ、ソウ（麻川莊之介の略稱）が居たんだな。」と苦笑した。寢ようとして居る處へ母屋へ遊びに行つて居た従妹が歸つて來た。お駒婆さんも一緒だ。「あのね、麻川さんが、晩のお食事後、こつちにお客さんの居るうちぢうお部屋の壁の外に椅子を運んでぢつとして腰のかけづめでしたよ。こちらのこと、何か立ち聞でもしてたんぢやありませんか。」と告げ口する。主人は、「さうかい。」と云つたきりだつた。私は告げ口した婆さんにも麻川氏にも何だか嫌な氣持ちがしたが「あのお客さんあんまり大聲で話したてゝたからね」と云つたあと、いくらか麻川氏に氣の毒な感じもした。

某日。——朝早く主人は社用で大阪に發つて行つた。麻川氏の部屋の前を通ると、氏は例の非常に丁寧なお辭儀をした。そしてH屋の表門まで私と一緒に主人を送つて出てまた丁寧な送別の辭を述べた。いつも乍ら好感の持てる氏の都會兒らしい行儀の好い態度、そして朝風に黒上布の單衣の裾が揺れる氏の長身を、伶俐に振りかざした鞭のやうに私はうしろから見た。畫家K氏は二三日前一たん東京へ歸り、早朝まだ一人の來客も麻川氏の部屋には無い。氏は私に寄つて行けと云ふ。氏の部屋の淺縁に腰かける。藤棚の藤が莢になつて朝風にゆらめくのを少し寢不足の眼で私がうつとりと眺め入つて居ると麻川氏は私のずつと後の薄暗い床脇に蹲居の恰好で坐り込んだ。そして暫く黙つて居た。私も黙つてゐた。眞白い犬が私の眼の前を通つた。犬は私の方を振り返り振り返り垣根の穴から出て行つた。麻川氏は唸るやうに太い聲で後から私に云つた。「僕あですな。理智主義と云はれる程、上昇しても居ません。また技巧派と片づけられる程墮落もして居ないつもりです……。」「あ、ゆんべの『種蒔く人』の云つたことですか。」私は直覺を言葉に出して仕舞つた。「種蒔く人。がどうだつて構はないんです。僕だつて、マルクスやレーニンに關心を持つことは敢て人後に落ちないつもりですからな。僕あ、趣味としてはことごとく在來の日本人だけれど精神力のたくましさに於て、マルクスや、レーニンにむしろ同じるな。」「さうでせうとも、あなたには、何處か精悍な齒があるわ。」